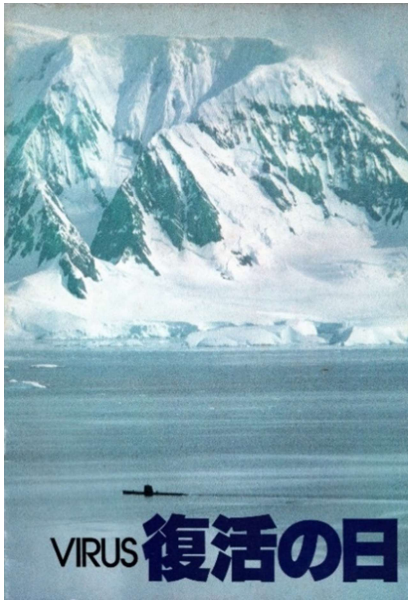


未来を見つめる力 **Intelligent Foresight** 1

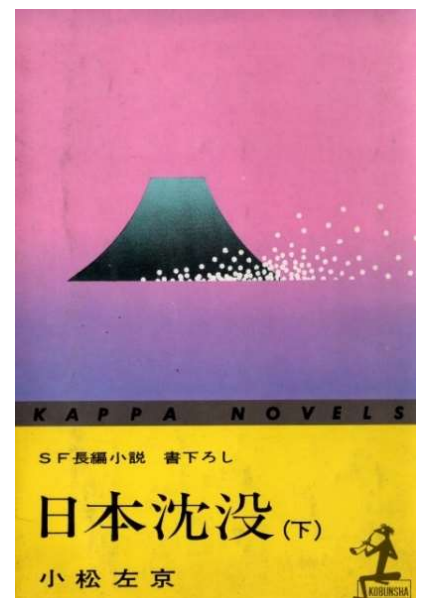
## 今日の危機を半世紀も前から警告していた作家・小松左京氏



深刻なウイルスの報道が続く中、頭に甦ってきたのが小松左京氏の小説『復活の日』です。氏は50年以上前（1964年）に発表した同書でウイルス感染の脅威を描いていました。注目すべきは未曾有の危機に瀕した時「人間は如何にあるべきか」という点です。架空の物語ですが風邪のような症状から人を死に至らしめる未知のウイルス感染が始まります。当初は新型インフルエンザと思われていました。「たかがインフルエンザ、その内に治まる」と人々が軽く受け留める一方じわじわと感染が蔓延していきます。この描写はとてもしリアルです。政治経済、交通や通信、職場、生活等あらゆる混乱が生じます。ウイルスの正体が判明しないまま医療現場は押し寄せる患者を診療します。不眠不休で患者と向かい合う医師や看護師たちは限界まで施し、やがて彼らも感染し倒れていきます。小説に描かれるウイルスは凶暴ですが、絶望的状况でも他人のために死力を尽

くす人々の姿は崇高です。怖いのがパニックに陥る人たちの集団ヒステリー。現実の世界でも買い占めや各国で吹き出す差別偏見は不快です。人間が築き上げた文明とは一体何だったのでしょうか。後戻りできない快適環境を求めた人間は自然界のデリケートな生態系を破壊し潜伏していたウイルスを目覚めさせ拡散しました。軍事に至っては細菌兵器を開発し実際に使用した記録もあります。SF/Science fiction（空想科学）は決して荒唐無稽ではありません。優れたSF作家はテーマに添った調査や取り組みがしっかりしています。小松左京氏も単に想像ではなく、その専門分野で研究を進める学者たちに取材し信憑性のある膨大な資料を基に物語を構成しています。氏には現実をしっかりと見つめる力があつたからこそ未来への警告ができたのではないのでしょうか。

それは氏の代表作『日本沈没』にも見られます。1973年発表のこの作品は地殻変動で日本列島が地滑りのように海底に沈むスペクタクルで完成までに9年も費やしています。もともと「日本人が国を失い、放浪の民族となったらどうなるのか」という発想で執筆が始まったそうですが、東京大学地球物理学教授・竹内均氏の学説をバックボーンに大陸や列島を乗せたプレートが動き変化する実態を読者に印象付けました。物語が日本海溝の異変から始まり巨大地震や津波の描写は3・11東北大震災に酷似していて、小松氏はまるで予言者のように騒がれました。問い合わせが殺到したほどです。つまりSFに強い関心が集まるのは「人間が試される」からです。絵空事ではなくかなり現実的設定の極限状態におかれた人間は如何に考え、行動するのでしょうか。**Intelligent Foresight**（先見の明）と共に視野を広く志を高く持ち、勇気ある行動が実践できてこそ良き人生を送ることになるのかも知れません。SFはその道標の一つではないのでしょうか。



## あとがき

今回の1面では、作家・小松左京氏の優れた先見の明をご紹介させて頂きました。書き足りないこともあります、何か感じて頂ければ幸いです。氏のプロフィールと、文章中に細菌とウイルスのことが出てきますので一応まとめてみました。ご存知とは思いますが参考になさってください。

## プロフィール

### 小松左京（こまつ さきょう）

1931年大阪生まれ。京都大学文学部イタリア文学科卒業。星新一・筒井康隆と共にSF御三家と呼ばれ、同時に戦後日本を代表する小説家でもあった。1970年「日本万国博覧会」のテーマ館サブ・プロデューサー、1990年「国際花と緑の博覧会」総合プロデューサーとしても知られる。広範囲で深い教養を備えた知識人であり、その活動範囲は幅広く膨大なジャンルにわたる。未来を書くSF作家としてデビューし、その直後から通常の作家の枠を超えた八面六臂の活動を始めている。ジャーナリストとして各地を歩き、メディア出演を精力的にこなし、未来研究会や多くの学者やクリエイターと交流を持つ。新世代の知識人として絶大な期待を寄せられる運命にあったと言える。執筆の傍ら、学者や財界人を相手に文明論を語り、日本論を闘わせる注目の人物であった。代表作に『復活の日』『日本沈没』『果しなき流れの果に』『さよならジュピター』『首都消失』等がある。2011年没（享年80歳）。

### 細菌とは

目で見ることのできない小さな生物です。一つの細胞しかないので単細胞生物と呼ばれます。細菌は栄養源さえあれば自分と同じ細菌を複製して増えていくことができます。人体に侵入して病気を起こす有害な細菌もいます。一方で「納豆菌」など人の生活に有用な細菌も存在します。人の体には多くの種類の細菌がいて、皮膚の表面や腸の中の環境を保っています。

人に病気を起こすことがある細菌としては、大腸菌、黄色ブドウ球菌、結核菌などが知られています。

抗菌薬が効かない或いは効きにくくなった細菌のことを薬剤耐性菌といいます。これまでなら効くはずの抗菌薬が効かなくなると、感染症の治療が難しくなるだけでなく、手術の時や抗がん剤治療で免疫が低下した時の感染予防等、様々な医療が困難になります。

### ウイルスとは

細菌の50分の1程度の大きさで、とても小さく自分で細胞を持ちません。ウイルスには細胞がないので、他の細胞に入り込んで生きていきます。人の体にウイルスが侵入すると、人の細胞の中に入って自分のコピーを作らせ、細胞が破裂して沢山のウイルスが飛び出し、他の細胞に入り込みます。このようにしてウイルスは増殖していきます。

人に病気を起こすことがあるウイルスとして、インフルエンザウイルス、ノロウイルスなどが知られています。風邪（普通感冒）は様々なウイルスが原因となります。

ウイルスは大きさや仕組みが細菌と異なるので、抗菌薬（抗生剤、抗生物質）は効きません。抗ウイルス薬はまだ少数しか開発されていません。